

海運の重要性を大学生に説明
～川崎市にて港湾施設の見学会を開催～

当協会は、日本の暮らしと産業を支える海運をはじめとする海事産業の重要性を学校教育において取り上げていただくよう、教育関係者に対し商船をはじめとする海事施設等の見学会や授業への協力、資料提供等を実施しております。

今般、東洋埠頭の協力を得て、8 月 4 日（月）に拓殖大学商学部 3～4 年生と、専修大学経済学部 2～3 年生の約 40 名を対象に、川崎港コンテナターミナル（以下、CT）の見学会を開催しましたので、その様子をお知らせします。

【見学会概要】

はじめに、バスで CT 構内を移動し、実際にコンテナが積み上げられている様子や、トランスファークレーンでコンテナを移動させる様子を見学しました。当日は、コンテナ船が離岸するところに立ち会い、タグボートに引っ張られて岸壁を離れ、出港していく様子を間近で見学するという貴重な体験ができました。また、コンテナバージ（はしけ）への荷役風景も見ることができ、「はしけ」を活用した環境に配慮したコンテナ移送について担当者から説明を受けました。



タグボートに引っ張られて離岸するコンテナ船



荷役について説明を聞く参加者

コンテナヤードでは、電源が接続されたリーファーコンテナや、タンクコンテナ等様々な種類のコンテナが蔵置されている様子を見学した他、コンテナを移動することのできる「リーチスタッカー」が実際にコンテナを掴み、持ち上げ、移動できることを実演いただき、参加者からはその迫力ある様子に驚きの声があがりました。

その後、参加者は、20FT ドライコンテナ・40FT ドライコンテナ、リーファーコンテナの中に実際に入り、内部の構造の違いについて学びました。特にリーファーコンテナは、 -10°C まで冷やしてあったため、扉を開けると冷気が漏れ出し、参加者は冷蔵品・冷凍品を運ぶリーファーコンテナ

の温度管理技術を体感していました。

リーファーコンテナには、コンテナ内の温度を表示する画面が外側についており、定期的に正しい温度に保たれているか確認をしているという説明を受けました。



リーチスタッカーの実演



コンテナ見学の様子



ドライコンテナの内部



—10℃に冷えたリーファーコンテナ内部を見学

ターミナル見学の後には、会議室にて、当協会担当者が海運に関する講義を行い、人口や荷動きの増加とともに成長している産業であることや、環境対応や安全運航をめぐる取り組み等を紹介しました。東洋埠頭の担当者からは、川崎港 CT について説明がありました。高速道路網の発達や、日本随一の冷凍・冷蔵倉庫の集積地という強みがあり、アジア各地との定期コンテナ航路が多数就航していることを学びました。

その後、人事担当の方から、東洋埠頭で行っている通関業務、ふ頭業務、倉庫業務等の物流サービスのほか、同社の実施する学生向けのインターンシッププログラムの紹介がありました。

講義後の質疑応答の時間には、参加した学生から「輸出入の割合が、輸入に偏るのはなぜか」という質問があがり、「輸出貨物は自動車関連部品が多いが、川崎ではそもそもそれら輸出貨物が少ない。一般的に輸出入のバランスがよい港は少なく、必ずしも輸出入のバランスがとれていることが良いとも限らない。」という回答がありました。



川崎港 CT についての講義

川崎港 CT の見学後には、「川崎マリエン（川崎市港湾振興会館）」に立ち寄り、展望台から川崎港 CT をはじめ、自動車輸出、資源輸入等のための施設を見学し、経済、暮らしと密接にかかわっている海運・港湾についての理解を深めました。

当協会は引き続き、日々の暮らしを支える海運について広く知っていただくための活動を実施してまいります。

以上